

## 生徒の学力自己評価について

馬 場 末 吉

生徒が平素の学習の結果をどのように自己評価しているかについて知ろうとして試みた調査の結果について記述したいと思う。

学習の結果の多寡、良否を調べる一般的な方法としてはテストが最も多く用いられると思うが、この調査は、教師の行ったテストの終了の際に、生徒各自に自己のテストの成績について見込の記入を行わせ、成績に関する自己評価とみなしたものである。

いうまでもなく、テスト結果についての生徒の見込が、彼等個々にとって確定的にできないこと、又時間的にも変動しやすいことは、誰でも経験するところで、殊に友人等の情報を入手したり交換したりすることで変動が起りやすいのであるが、自己評価というものが、こうした客観的な材料を参考にしながら行うことでほんとうのものをつかみうることを考慮して考える時はその時機をテスト直後に選ぶことは妥当とはいえないが、逆に自己の直感的な要素のみが、どのような妥当性を持っているかを知ることがをねらってこの調査は企てられた。その為にテスト終了後時間を隔てる時は友人などを通して得るテストに関する情報について各人同じ条件を期待することが困難となるから、客観的な又は他からの資料で自己評価についての判断がどの程度の変容を来すかを知ることとも困難となるわけで、従って自己だけの、テストの経験だけをもとにした成績についての評価が、各生徒の条件を齊一するためには最も好都合といえるわけである。

テスト中は問題を与えて、それをどう解釈しどう処理するかについてもなるだけ、各自の判断にまかせ、個別に生徒に助言したりヒントを

与えたりすることを避けるようにした。

次に生徒の成績の自己評価の結果の表現であるが、テストの構成が、必ずしも100点又は10点又は50点満点の問題構成に出来ていない場合、又毎回の満点数が異なる場合に、生徒に自己評価の結果をどのように記述させるかは問題のある点であるが、この調査は毎回100点満点法で表現を統一した。これが、生徒にとっても便利であり、又習熟できるからである。

次に生徒の点数の表現であるが、それは直観的な見込点数をどの程度正直にあらわしているかという問題がある。見込はついても、確信をもって見込みはついても表現したくない場合、表現することを強制的に感ずるならば、いくらかカムフラージュしたいといった場合が起ることが考えられる。

この度の調査では見込点数の記述を強制しているような印象を与えないように配慮した。

第 1 表

このテストで私は

1. 大体 点 (100点満点) だと思う。
2. 問題をみて
  - a これならでき。
  - b ずいぶんむずかしい。
  - c まあまあといった程度。
  - d むずかしさは今まで通り。
  - e むずかしくなっている。
  - f やさしくなっている。と思った。
3. 解答の中で、私が特に自信のもてるのは
  - 1 2 3 4 5 6 7特にこまったもの。
  - 1 2 3 4 5 6 7
4. この問題でヤマの当たったもの。
  - 1 2 3 4 5 6 7

見込の記述が、どの程度の真実を表わすかは一樣にはいい得ないわけであるが、ただその記述は強制的になされたものでないといえるのである。

#### ◆調査方法の実施の概要

テストの際解答用紙に第1表のような質問をすりこみ、テスト問題に解答後、又はテスト時間の終了後2～3分の時間を与えて質問に答えを記入させた。

ただし質問の第2・4項は2～3回の実施後は中止した。

質問の第1・3項は夫々関連し見込点数の記入がまったくのでたために流れるのを防ぐ意図のもとになされたのである。

けれども数回の調査で生徒が、見込点数を記入した場合は、その記述はひどくでたらめなものでないことが、大体確められたのでこの点にはあまり立入った調査はしなかった。又生徒も見込点数は記入するが、他の質問には答えない（逆の場合は事例極めて少い）場合もだんだん多くなって来た。

調査の対象となったのは昭和32年度の本校第1学年であった男女生徒201名で男121名女80名である。その人員には入学の当初から1学年を修了するまで変動はなかった。

調査はこの対象生徒に一学年の中に行った社会科のテストの時に行ったもので都合10回行ったものが第1～4回は第1学期に、第5～8回を第2学期に9・10回を第3学期に行った。

テストは内3回を除いて大体筆者で立案構成したが、問題の難易は必ずしも一定していない。筆者が立案構成しなかった2回は、他の8回のテストに比して相当レベルが下げられている感じのものであった。

#### ◆調査の結果についての考察

##### I 応答数について

この調査についての応答は内容が簡易でさしてくわしく説明を要するものでなく、又大した説明をしたわけでもない。又応答は必ずしも強制されているわけでもないことは前述の通りであるが、今テスト受験数と質問に対する応答数とをテストの得点平均と共に毎回別に表示すると第2表の通りとなる。

第2表 応答数について

テスト	調査人員		応答数		テスト成績	
	男	女	男	女	男	女
1	121	80	112	65	81.0	68.0
2	120	80	100	61	49.2	38.2
3	120	80	103	63	82.2	75.7
4	121	80	116	69	39.4	28.4
5	121	80	75	37	64.2	56.0
6	120	79	86	52	55.8	46.9
7	119	79	81	50	61.3	52.0
8	120	80	48	20	58.7	45.2
9	121	79	113	64	59.6	48.9
10	121	80	88	51	54.4	45.3

これによって見ると

- 1 応答率は第2学期が第1学期に比べて著している。第2学期に比べ第3学期は幾分上昇している。
- 2 男女の比較では女子の応答率が男子に比べて悪い。これは男女の性格の相違によるだろうが、成績がよくないことにもよるだろうと思われる。

この点については不応答者が被検者群中のテスト成績中位以下の中に多くふくまれる数が、女子の場合特に多い点で、第3表で指摘できる。即ち、男子は成績が多少悪い場合でも之をはっきりいえるのに、女子の場合は、成績がよくないとこれを自分ではっきりいいがらない傾向が目立つわけである。

第3表 不応答者中の成績下半数群に含まれる者の数 ( ) 中は不応答者総数

テスト	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
男	4(9)	7(20)	2(7)	2(5)	20(46)	14(34)	10(38)	28(72)	4(8)	12(25)
女	11(15)	10(19)	9(16)	9(11)	23(43)	21(37)	21(40)	26(60)	11(15)	16(29)

3 応答率の推移は成績の推移と一致しないといえる。或は、問題の難易によって応答率は大した変化は受けていないともいえそうである。即ち第1回に比べて第2回は相当程度むづかしく、又第3回は第2回に比べ著しくやさしくなっているのであるが、応答率の変化は問題の程度、成績の変化ほどに著しくはあらわれない。

第1～4回は前述第1学期に行われ、就中第1回は入学早々に行われた。時季的に入学当初の緊張と希望に満ちた環境にあり、こういう環境の中に行われたテストに対する態度が、質問に対してもテストに対すると同じような態度を造り出し、それは、大体順調な学校生活では相当長期にわたり持続されると考えられる。又新しく構成された学級編成もまだ不安定なままに各自の不安と緊張を容易には解消させないものがあつたように考えられる。

第5回は第2学期に行われたわけで、第4回テストとの間には夏休や学級内の力関係の変動が行われ、それによって或程度第1学期中にみられた不安定な緊張は解消され、テストに対する態度にも大きな変化があることが考えられるわけである。

なお今一つ、第2学期テストは第1学期に比べ、問題数が多くなっている。この点は第2学期の応答数を減少させた大きな要素の一つであろうと思われる。第3学期のテストはその点問題数を減じて解答に多少の時間的なゆとりを与えるように配慮を行った。応答率の上昇回復がその点指摘できるわけである。

## II 自己評価の妥当性について

テスト成績についての自己の見込点数を記述させる場合、強制しなれば、記述したくなければ記述しないで済むが、中には記述しても、それがいくらか卒直さをかいている場合のある場合があることは考えられる、又見込そのものが変動したり、あてはずれの起ることも当然予想できるところであるが、とにかく記述した見込点数と教師の成績採点の結果との一致の度合を検討して、自己評価の妥当性を考察してみることにする。

第4表は男女別に毎回調査の結果を調査群全

第4表

テ ス ト	男 子			女 子		
	全体の 得点 平均	自己評価 者の得点 平均	自己評価 の得点 平均	全体の 得点 平均	自己評価 者の得点 平均	自己評価 の得点 平均
1	81.0	83.4	81.0	68.0	64.0	65.5
2	49.2	50.2	55.0	38.2	38.1	41.1
3	82.2	82.6	61.2	75.7	76.2	51.2
4	39.4	39.8	36.2	28.4	29.1	26.3
5	64.2	59.8	50.8	56.0	56.6	38.8
6	55.8	56.7	47.5	46.9	48.8	41.6
7	61.3	63.0	50.0	52.0	55.5	34.8
8	58.7	66.2	48.5	45.2	54.0	43.0
9	59.6	61.3	52.5	48.9	41.7	34.8
10	54.4	55.8	43.2	45.4	46.4	30.2

体のテスト得点平均、応答者の得点平均、応答者の自己評価平均点を表出したものでこれによって考察する時は、

- 1 最初の1・2回には過大評価が見られるが後はたえて再びあらわれないこと、概して過小評価の傾向が特徴である。これはテストで非常にむづかしいといった印象を与えられた場合は次のテストの場合には、問題の難易に拘りなく影響を及ぼすものと察せられる。そういう点では全体的には生徒はテストに対し警戒的な緊張した、従ってゆとりのない心理状態で臨んでいるものと察せられる。
- 2 男女の間には毎回到共通した特徴、差異は明確にはつかめない、殊に、第5回以後は女子の場合応答者の数は少くない、毎回同一人が応答するとはきまっていないから、これは

第5表

自己評価と成績の相関

テ ス ト	男 子	女 子
1	.247	.690
2	.243	.536
3	.248	.434
4	.330	.514
5	.239	.542
6	.373	.517
7	.288	.082
8	.192	.373
9	.591	.715
10	.368	.479

応答者群の質が、毎回同じものでなかったことが原因しているといえそうである。

毎回の調査の応答者について、成績と自己評価点との相関係数を算出して表出すると第5表の通りである。これによって見ると、

- 1 僅かの例外もあ

るが概して女子の場合に相関度が高く、その自己評価は妥当性があるといえるのであるが、これは前掲第3の女子の質問応答者が男子に比べ質がよいことに起因するのではなからうか。即ち男子の場合は成績上位の者で質問に応じない者、成績下位で質問に応じるものが相当いるのに反し、女子の場合は上位者は応答者も多く、下位者には応答者が少いことによると思う。(但し、女子の場合第6.10回ではこの傾向は大して顕著でない)

- 2 女子の場合に第7回の調査は著しく相関度が低くなっているが、これは問題形式が、アチーブメント式に相当程度記述テストを加えたため、記述解答に不慣れた結果見込み違いを大きくしたといえそうである。女子はどうも環境の変化に機敏に順応するという点では男子に劣るようである。

第1図

テスト成績	0~9	10~19	20~29	30~39	40~49
自己評価					
0~9	○	..		..	
10~19		○	..		
20~29			○	..	
30~39				○	
40~49					○
50~59					..

(縮小)

次に第1図の如き分布表で、自己評価者を成績との相関で一応過大評価、適正評価、過小評価の3区分に集計して毎回の調査を男女別に表示すると第6表となる。

これによってみると、問題から受ける難易の印象、又は自己評価の適正の度合が第1~5回までは男女大体同じ風にあらわれているが、第6回以後は相当に男女の間で異った風にあらわれている、これは応答者群の変質化によるものとも受取れるが、反面、男女で問題の難易についての印象をちがった面から受取ることから生ずるのではないかと察せられるのである。

第6表

テスト	自己評価数		過評価数		適正評価数		過小評価数	
	男	女	男	女	男	女	男	女
1	112	65	34	19	42	19	37	27
2	100	61	63	29	16	11	21	21
3	113	63	12	2	18	9	83	50
4	116	69	43	21	23	19	50	29
5	75	37	11	5	14	5	50	24
6	86	52	26	9	13	11	47	22
7	81	50	15	4	20	6	46	27
8	48	20	7	5	6	1	35	14
9	113	64	30	4	18	16	65	42
10	88	51	15	4	18	10	55	37

又適正評価者数の比率は毎回共通して男女何れが高いとはいきれない。前出の相関係数の表と併せ考えると、生徒個々の場合について、どの程度適正な自己評価がなされているかについて男女間にさしたる差はみられないが、多少過小又は過大に流れることはあっても女子の場合が比較的ひどく見当違いはしてないといえそうである。その点は軽率で粗暴な傾きが多いとみられよう。

### Ⅲ 自己評価に対する個別的考察

まず10回の調査に毎回ほとんど応答を示したものを、テスト成績及び成績の傾向について区分してみると第7表の通りである。

第7表

総数	集団中の位置			学習の進歩			
	上	中	下	上昇	下降	安定	停滞
男 63	24	35	4	11	11	14	27
女 18	2	14	2	2	7	5	4

これによってみると、

- 1 男が女に比べて応答者が多いことが目立つが、之は、前述第2表の成績、平素の学習等から判断して男子がテストに対し余り抵抗を意識せず、余裕をもっているためと判断される、上中位群に属するものが男子の場合特に多いこともそれを物語っているといえよう。
- 2 女子の場合、応答者は中位群に圧倒的に多く上下位群には少い、これは上位群と大体男

子と伍してテストで競争しようとする者には、これだけ余裕が少く、またまじめに応答しようとする物はそれだけ、成績の面で手落ができている、又は、重点を捉えて努力を集中するような器用さをかいている結果ではなかろうか。

- 3 学習の進歩の傾向については、少、資料不足ではっきりした断言をするのを躊躇しなければならない。

次に10回の調査中7回以上応答しなかったものについて、第7表と同様な観点で整理集計すると第8表の通りとなる。

第 8 表

総 数	集団中の位置			学 習 の 進 歩			
	上	中	下	上昇	下降	安定	停滞
男 5	1	2	2	0	3	1	1
女 11	2	3	6	4	1	0	6

これによってみると、

- 1 不応答者は女子が特に多いこと、且それは下位群に集中しているのが、特徴である。進歩の傾向からみた場合女子には上昇傾向の者に不応答者の多いのは、第7表についての2の記述と相関連すると考えられる。